

「北郷」から「都城島津」へ

江戸時代初期の鹿児島藩と都城

【都城島津家鹿児島御屋敷図】 鹿児島屋敷は、1661(寛文元)年に鶴丸城の南東に位置する滑川に築かれました。領主屋敷は、藩主が来邸することもあり、能舞台や庭園が築かれていたことが分かります。

◎問い合わせ 都城島津邸 ☎23-2116

本企画展では、江戸時代初期の鹿児島藩と都城領の政治的関係をたどり、都城島津家がどのように領政を構築していくのか、宮崎県文化財に一括指定された都城島津家史料を中心に紹介します。

なぜ、北郷から島津に改姓したのか？

徳川幕府が誕生したころ、南九州では「関ヶ原戦後交渉」を乗り越えた島津氏が、幕府による支配に対応するため、新たな政治体制づくりを行っていました。しかし、戦国時代の気風が残る重臣家が多く、体制づくりは思うようにいきません。

当時、都城では12代北郷忠能の死後、息子の翁久と忠亮が早世すると、以後4代にわたり鹿児島藩主の子が養子入りしました。その中で、藩は「藩政に順応できる都城領政」への転換を図ります。この政治的関係の中で築かれた新たな政治体制を端的に示したのが、島津改姓でした。



北郷久直像

●主な展示史料

【北郷久直像】

15代当主久直は、藩主家久の三男で、養子として当主となりました。1634(寛永11)年に家督を相続した久直は、戦国の気風が残る家中の反発の中で、さまざまな政策を行いました。とりわけ、所領高にに応じた騎馬数の制定など、出陣における軍団編成の確立を目指しました。そうした久直の「二武」に対する姿勢が、当家唯一の甲冑姿として描かれたのかもかもしれません。

【本小札萌黄糸威二枚胴具足(17代忠長着用)】

兜の正面には、丸に十字紋をデザインした金箔押の三つ鍬の形をした前立があらわされていて、島津家の甲冑を象徴しています。また、萌黄色の糸を主とした威が施されていて、鮮やかな色合いは、忠長の性格を想起させます。

※上下の鉄部を糸で結び合わせることで



本小札萌黄糸威三枚胴具足



柵寝重長像

【柵寝重長像(旧永田家史料)】

柵寝重長は、戦国・安土桃山期の武将です。重長が当主であったころの柵寝氏は、大隅半島南部の根占を本拠としていました。島津本家に対抗していましたが、1573(天正元)年以降は島津氏と連携して肝付氏と戦っています。

この像は、重長の出家姿を描いたもので、太めの眉にひげを蓄え、やや切れ長の目が、戦に明け暮れた生前の重長の猛々しさを想像させてくれます。

企画展の概要

●会期 7月30日(土)～10月2日

(日) ※月曜日は休館日(月曜日が祝日の場合は、その翌日)

●観覧料 一般220円(160円)、高校生・大学生160円

(110円)、中学生以下無料

※()内は20人以上の団体料金